類聚名物考

百廿九

和書門 類 二七七九八 號 一一二 函 五 架 一六一 冊

内閣文庫 和書 類 二七七九八 號 一六一 冊 二〇九 函 一五 架

内閣文庫
番號 和 27798
冊數 156 (142)
函號 209 106

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x·rite
MSCCPPCC0817
MSCCPPPPE0817

国立公文書館
National Archives of Japan

明治十三年謄寫

故事十一

同 二十

類聚名物考

百二十九巻

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書

毘婆沙論云云○法數偈曰芥子従横堆百里云
城四方并高各一百里満堆芥子
兜率銖衣拂青石云石廣一由旬厚半
由旬兜率天人一百年以六銖衣一拂至
石銷尽以為一劫

蟻通神乃事

○河社契沖清少納言云小蟻通の神乃ことを出す附ふ地のめとを本の（雌雄）

本のうちハ經説ホお

雜寶藏經第一云佛言過去久遠有国名棄老、彼国有老人者、皆遠驅棄、有一大臣、其父年老、依国法應棄、孝順心不思、堀地作密屋置父孝養爾時天神捉二蛇著三殿上言、若別雄雌汝國安若不別者汝身及國七日之後悉当覆滅、王聞懷懊惱与群臣参議各称不能別、即募國界、別者加爵賞、大臣帰家、往問其父父言易別、以細耎物、停蛇著上、躁擾者其雄、不動者是雌、即如其言、果別雄雌、乃至 天神又以一梅檀木方之正等、何是頭、臣問父、答、放著水中、根沈尾擧、乃至 天神歡喜、大遺国王珍奇財宝、汝今國土当權護 王大踊悦而問、臣言為是自知者、人教汝、臣答非臣智、願施無畏乃敢具陳、王言、設汝有万死罪猶尚不問、況小罪過、臣

曰、王言国有制命、臣有老父不忍遺棄把法藏地中、臣咎盡父智唯願大王、一切国土還聴養老、王心生喜悦、奉養臣父尊以為師普告天下、不聴棄老、仰命孝養

七わたの玉の緒をぬけるすハ林氏しるこの文をひきて申わるまけち思ひ之イ神代すこみゆけまゐちるへかひるゝ人を棄られきゝるよまきたましく 近衛尉を主れし後のるハ猶しろきれハかりそめなる拙詞残そのまゝに也さるもへし

○戰国策云 斉襄王卒、子建立后事秦謹与諸侯信、以故建立四十餘年不受兵、始皇嘗使使者遺后玉連環曰、斉多知解此環不、后以示群臣不知解、后引椎椎破之、謝秦使曰、謹以解矣

欽明紀云、又高麗上表疏書于烏羽、字随羽黒、既無識者、王辰爾乃蒸羽於飯氣、以帛印羽、悉写其字、朝廷異之 是ホ似よる

てゆきり

○雑和集 上 一五

一 蟻通明神之事

賀茂社本縁

○述異記下 夜郎縣者西南遠夷国名也、其先有女子浣紗、忽見三節竹、流入足間、聞其中有号声、剖竹視之、得一男、帰而養之、及長有武略、自立為夜郎侯、以竹為姓、漢武帝元鼎六年征西南夷、改為牂牁郡、夜郎侯迎降、天子賜以王印綬、後卒、夷獠咸以竹王非血氣所生、衆為立廟、今夜郎縣有竹王神是也

国立公文書館
National Archives of Japan

三輪神本縁

○土佐國風土記 神河[ミハカハ]訓三輪川源出此山之中届伊与国水清故為大神醸酒也用此河水故為河名也倭迹々媛皇女為大三輪大神婦毎夜有一壮士密来暁帰皇女思奇以綜麻貫針及壮士之暁去也以針貫襴及旦也看之唯有三輪遺器者故時人称為三輪村社名亦然 云々 万葉集仙覚抄第一

○今案ニ此風土記ニよれハ土佐国乃事にていへるこのもとハ古事記ニ出たり

宇治のはし姫

○[illegible]抄云 はし姫ハ橋を護る神之
さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらんうちのはしひめ
是ハ宇治の橋のもとに姫大明神とて侍り
[illegible]宇治のはしひめをよめるとて[illegible]め[illegible]
此橋守も姫大明神の事也 かのはし姫の物語ハむかし妻二人を
もちける男もとの妻のつはりにて七色の和布をほしかりて伊勢
の海へまかりて龍にとられて失にけりかの妻歎きかなしみて
[illegible]さむしろに衣かたしき今宵もやの歌を詠てまちける
よすがら又今の妻も歎きて[illegible]けれハ同歌を詠けると 云々
この事河林[illegible]

河社 家井於菜、文 ○雑和集上 廿六 十か条中石の事
岩橋状契 六十五 後拾遺集

神のいかきも越ぬといふ事
○柿本人丸集
ちはやふる神のい垣もこえぬへし今ハ我名のをしけくもなし

神風の伊勢

○雑和集 上 西左 七 神風之事付たまきぎ る すゝ河

一

多気宮　たけのみやこ　竹都　神祇志地理志再出

竹都ハ伊勢斎宮のおはしまし所を云ものなり後世ハ神秘の
様に思ひなす人もありや竹都と云ハ其より仮字なりけるを
同し様に親王を竹園と云ふを転りて附会せる説も有り
大和物語にたけのみやこ　こぞありしも証によめり　多気ハ伊勢の
国の郡名之名なり　和名抄にも多気郡竹と出せり　神祇
史にも多気大神宮のなり[illegible]下にも志るし続日本後記にも多
気宮地とも宮地ハみやのところと訓を略してハみやこと訓るれハ
やがて都とも云ひし也

○続日本紀巻一文武天皇二年十二月乙卯、遷多気太神宮于度
合郡、

○続日本後紀巻八仁明天皇承和六年十二月己酉朔庚戌遣参議
従四位上行春宮大夫兼右衛門督文室朝臣秋津、奉幣
於伊勢太神、以斎宮焼損也、又去天長九年九月依多気

齋宮遠離太神宮、毎叓無使卜定度會離宮、以為齋宮、
焉今依火災、卜定多氣官地可為常齋宮之状、同令此使
祈申於太神宮

うさかの森の事

○雑和集 上 三左

二うさかのもりの事

筑摩祭　つくまのまつり

○雑和集 上 三右口左　三はくまのまつり 友

○月見るをいむ事

○小野小町集　なかしいえなるをとこのひとくまて かくれて見るに 月のいとあはれなるを見て わくをこそいとへちゝ・たしられとものこふなるむ逢ハ男いむなる 袖をいとへは イふときぬ袂そ

ひとりねのわびしきまゝにおきゐつゝ月をあはれといひてそねつる

○拾遺後撰集　応よみて

○伊勢集
いせ人ハ志のみ抱くて　我もさらに　このまのこのこそうやられつる

○魯陽公与韓構戦、日将暮不勝、魯陽公至誠麾戈日為之退三舎

○文撰辨命論劉孝標　魯山之力無以抗、倒日之誠弗能感

月の嵐　つきのねすゝ

○雑和集 廿六左上 十四月の嵐ゝ事

○新林拾葉集 九

月日の嵐 新林拾葉九

月を友猿 新林拾葉八

行合の霜ゝゝ　和歌辨説玄具生

ゆきあひ乃霜のこと　○雑和集 上 十八左 かさゝきの行合ころ

○秋や宮き衣やうたれかさゝきの行あひのまゝ霜やおくらん

○いせ集

又しもおもひあひのそらにふるてうとゝ身さへさむく行てみるらん

○拾玉集 又

杉の風のはふをねなりおく霜のむすをもみ菱も月そなかめる 四

かりそきのはふをねまも荒めくしこの世なりけてそ住吉の神

○壬二集

八幡山杉乃桜も かくそきのはあらしの霜のさハえぬなり

○夫木抄 卅 家隆

雪中の筆家林拾遺九

○三輪の山志るしの杉の事

○藤原元真集

三わの山すきの梢も（杉）しらすてちきりせしまてこそ君そたつる

雪ふれハみえてやしきこゝの山すきの杉もみえしとそくも

○後撰集 十六 二 女のもとへつかハしける 読人不知

きたのこゝろにこそ三輪の山もとも杉の数をハ我そつくまし（まい）

末の松山浪越るといふ事

余材抄

○契沖云　末の松山の事　顕昭古今注云　能因哥枕にハ　その
松中の松　末の松　松ろこゝをすゑとかされハすゑや山にハいま
て末の松とよめるも侍りとみえたり
○末の松とのといへるハ源氏物語にもまつ行明集に
ハ末の山といひえ古集にも末の山とよめり此古今集の哥
まつきて別てな縁をこしふハしられハこの哥にも猶
まかえしてけりや此松の詞にハ此哥多く神妙によむ
歴々の哥に東日更出雲式ハ河え東為星辰と云まゝ史
記に使河の帯萬山如砺と見る誓こそなりまさる哉
ありていつる
古今集
君をおきてあたし心を我もたハ末の松山浪もこえなん
日本紀万葉に除をおきてと訓のけての意　他をあたと
よみ

○末の松山の事
○伊勢集
いかにハ波をこえまし末の松山思ひいれらるゝ人のならましか
○藤原元真集
末の松山まつ人とのこゝをのみつて秋をハいるらん契ありけん
○後撰集十一恋三　かねてよりの契かれゆくになりて年こえ
てとふらひ侍りけれハ　元平のみこのむすめ
いつしかのこえぬる松山のなこりの契いつかあるらん
○源氏物語
浪こゆるころとも知らす末の松まつらんとのみ思ひけるかな
○源信明集
末の山むかしよりまつ君をおきて浪こすまちも思ひしりそれ
○紀貫之集
松えたく咲てかゝる藤浪を今ハ松山こすとこそみん

○宇津保物語　藤英
何と云ハさらに　此ゆ松山のなみだこそしもこえる浪ならぬ
まきひろ
○新深遠集
松山のいはこゆるなみまでおもひおもふころあらは
子の日まゐれる人の小松をきのりをむすひてこまをや
海松といふかんとしひらしく
松山は波のなみだちそのこれハ何やらかくれけり　子の日えなり
○蜻蛉日記
松山のさしこえてしもかうしも我ならそへてさうし浪代
○源重之集
末の松ひきさきそまつる我ならぬ浪のこゑをさらとはぬきさまよ
○京極法師集
松山のなみハ　越もしれるを　末のまつ志ら浪そこえ

○源政集
松山もこゆるほとなる白波のたえん月とハかけもなかりけん　雅子内親王
夫木抄
うらめしハ末の松山いつかまつ　きみの竊をこえる浪かな　能宣
左注云　此歌ハ梨壺にて和歌えらふとて　これかきはる
日かけにかくる内侍のかたへ返しのつかひより　歌花
を梅よりおこして侍りけれハかくなむと云て
○大中臣能宣集
ちきりきな　末の松山なきものハこゆる浪のこゑ絶えめ
○平兼盛集
何をかは河のむすめる　末の松山ハいくそかへりの子手ぬらん
○桐壺集
何いそのみなみハ松やらんらん末の松まて　波こえくとも
いつまてか　波やこさらん　末の松まつの緑におりやけり

○丈木抄　廾
涙にくるゝなみや秋のこゑ如人家城の原の末乃松山　俊成卿女

○むろの八嶋の名所の事　地理部　袖奥抄
○一時隠第に家の八嶋ハ連哥のさし合也山なとも何にても有へきもあしき
いつくはむろの中またゝ川なりけり島にこのしろといふ魚やらん
下野の國の名所也むかし或人子を殺しその葬送をとひへられ
ま子をたゝえてつなしといふ魚をやきてその烟を親にかゝせたりとも
や又林藻去の也れそのゝ八室の八嶋ハ池中之嶋ニ八嶋ニ祭ニ八神ニ世傳
此州冨人有故於庭池邊積薪焼魚故歌人執之為故事ニこの
説のめくる縁ハなる道ともなるへき名所也
今の世の律家にハ今このしろといふ魚の異名也といふその外
梅さくらなる稀とも侍ふ事ハまたき

○新和集　中　三左　三
むろの中まし支

をばすて山

○古今集十七 雑歌上 題不知よみ人しらず

我心なぐさめかね川さらしなや をばすて山にてる月を見て

○同古抄 為家假名と云作ふ 此歌ハ首信濃国 木曽の坂に住ける男の母
うけてけるに伯母をいと引しみてむこにけるをこの甥の男妻
事にふれて 此伯母をまくらにて わるしといひて此男にむかひて
是をいづくへもつれて捨よと申すハ 我此家の中にハをと
らしといひ侍りければ ゆふさり向までのこねすごくけるに
相く思ひ捷てこのめまゝに出ていふんとしければ子ともちからも
何まいる中まで離れるんをもさすかに抱うしとや思ひけん此
伯母ひとりしと思ひなりて 更科郡ちくまの川よりちかき山
にすてて置て帰り来りけり妻よろこびて 恵ミまけてそのみ
ける男ハうれしと思ひてかりさそてその夜るのおもひ捨つる山
より月のさし出るを見て伯母の何にてかしてかいまさんと

哀に思ひやりてよミけるうた　それより此山を姨捨山と云
て月の名所といへり　此伯母ハ石となりて今の世までも有るらん
かのよめの母も石と成て小山を隔てゝ有　とあれ大和物語にハ
伯母すてられきてあると　いへり
○今案に今の世までも姨石婦石なと云てかの所にありとや
これハ大和物語に見えし所ハ聞しうつゝ

○大和物語

姨捨山月　六十三　俊頼口伝集

久米路橋　くめぢのはし

○雑和集　上　四五　旧くめぢの橋との　付　岩はしのこと

うきまの志ま

○

○おほつかなうきまよ傍の人なれやなミ云のみ残しぬ哉 なる　公任

○袖中抄

○野中の志ミ川の事　播磨国印南郡

○中務家集志りたる人のもとにいたりてまさいきなりに

見る人の袖河中くぬるく印南野の野中乃ふるきいける母

○古今集十七　雜哥上

古への野中の清水ぬるけれともとの心を志る人そくむ

○同十口抄 あ家に他と云ふ 此哥ハ業平天皇の時 夏の比清水

せさるに時野の中なる清水をくミてまかりせるけ

るたつねて何かるゆけるあひけに又の夏の比清水くつめ

たりしにまかりせもてぬるく見しハまかりせざりしに夏

つめるかりしまにて清水のぬるひハ冬ハぬるくて夏

ハつめたき事ハ時ハぬるかりけれハかくよとめひ冬とこし

或云むかしある男女残思ひて来たくるかりしこの男もとき

其の女ともてなりてはけるゝやみそ其のあとをきそうつりて　十

年ふりぬるて あなたへ帰りまゐりけり この首見ゆ 女ハことの外におどろ
へてありしも何となき若しかりけれともよろ川てたくらしくつき
てきて けさ越よりて つかしけりともつへて
○後撰集上恋之部 女よみ 妻 かへり侍て男のもとへつかは
しける
我かためハいとゝ浅くやなりぬらん野中の清水深さまされハ よみ人しらす
同集恋に 思ひ侍ける人の心も何とて忘られにけるを 同
まへてもあるとを出て侍りけるふみを見出てつかはしける
古への野中の清水見るからにさしくむ物ハ涙なりけり

○いさよひの記 阿仏尼 長哥
志き嶋や 大和の国ハ いにしへおもへり 播磨のさらひまて 一つなかれを
くみしハ野中の清水をもとのこゝろのまゝにまかせつゝとく
これなるさきの詠ミて 何事かいふまい 鶴宮への 御引け
ハ子世の光りさしそへて何きうそきせの外ハさらえん
○同表書其のいち野中の清水をとることゝて
わすれぬもとの心のまゝなる野中清水みをうたへん
とよまれたるその詠歌の詞へてハれたる言葉ハ 新勅撰に入
てまさりし
○夫木抄 貝祝
いるゝ町や野中清水絵あての玉やえ涼しさしのかり宿
○狭衣
今更えさ恋さらん命ゆえてこそぬ野中の水れ忘れへ志ハ
立帰り下る人けも古への野中の名をこそたえまりけり

○袖中抄十　遇不逢恋
古への清水くみま見れハ野中ふる道志をりなくせれ
○菊丹集　以秋哥十首の中
わすれすよ野中の妻ハさ仰庵の好み吐や思ひ出らん

野中清水哥　林拾葉六

○彷地吐懐編上　野中清水　播磨　今南野　大和布留
いにしへの野中の清水ぬるけれと本の心を志る人そくむ
い
野中清水ハ南野也といふハ古き説也今案けるハ古今
に石上ふるから小野のもとかしハといへるつゝけふるから
小野ハ定家卿の公布留指小野すて、古る野のかれたる時を
いふとみえたり　顕昭式に舊柏野しと　本柏といへるに叶へり
然れハいにしへの野をハ古る野といふにや　日本後記に桓武天
皇の御時　古歌にも
いにしへの野中古道あらためハあらたまらんや野中古道
拾遺集に輔親やまとを指名によめる哥に
古道に我やまとはんいにしへの野中の草ハ茂りあひにけり
是ハ古の古哥の…ふまえて　やすて顕の大和のふる野にてよめり

とよみし貫之の歌にふるの中道とよめるによりなるへし　古歌に

清水ながるとは貫之集に

石上ふる野の中の草むらて清水なくてやまはかへらん

末のつゆあれと寂蓮法師の歌にも

昔みし布留野の沢の忘水何今更に思ひ出らん

是らの歌に心といひ詞といひ今の野中の清水にかなひは

道は随ておもはれ侍り

○今案に契沖の書によれは大和国布留野に古清水

ありとこの事をいへるは似たるやうなれとその故はまつ

那須溜跡を考ふるに

よるべの水

○夫木抄七　光臺院入道二品親王家五十首

従二位家隆卿

わするなよよる人のこゝろおもひ出てはかなひの名残まで清

よるべの水　歌林拾葉二　夏

万葉集　十二　日並知皇子尊殯宮の時柿本

朝臣人麿作歌　其の長歌の中の一本に刺(サス)

竹之皇子(ミコト)宮人帰邊(ヨルベ)不知尓為(シラニシテ)とありこの

帰邊をハヨルヘとも又ハユクヘとも訓へきなれとも

ヨルヘと訓へるまさなり

清滝や一葉ぞ流　歌林拾葉七

水の流をも川といふ事

○玉葉集一　京極殿の池にて葉を筏のかたに作りてうか
したりしを見て
君か代に流れてとめぬ水の面に世筏作りて見る紙師

○続古今集　賀
大井川みせきに一面むすふもののふの紅葉にまかひけるかな　前中納言匡房

○新後撰集　賀
水上も末もすみ行大井川君か千代の宿のたえぬなかれて　入道前太政大臣

○清原元輔集
白川の玉藻はことに拾ひつゝみをせきても見んなかれかしも

わか菜つむ子日の松の千代のためしつくせよ白川の水

○詞花集　曽根好忠

水上のさためてけれハ君か代にふたゝひすめる堀河の水

女郎花

○述異記上　昔戦国時、魏国苦秦之難、有民従征伐秦、久不返、妻思而卒、既葬、塚上生木、枝葉皆向夫所在而傾、因名相思木、今秦趙間、有相思草、状如石竹、而節々相續、一名断腸草、又名愁婦草、亦名孀草、人呼為寡婦莎、蓋相思之流也

○或書　平城天皇の御宇小野頼風といふ人八幡に住しか京に女をおきて互に通ひしか八幡の女恨みて河へ身をなけむなしくなりぬ男悔りて跡をさそのまゝ河に行てなきなき衣装残して脱すてしに土にとりつきてあれとも女郎花と成頼風そのをとに立よれハけ花うらみたる気色にて水へなひき立のけいきのめし頼風狂たへかねて女の死したる河へ身投なけり夫より夫婦の塚を立て男塚女塚といへり　山城国八幡に有

○ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千とせを我はへにけん　古今

○盛弘之荊州記、菊水出穣縣、芳菊被崖、水極甘香、谷中皆飲此水上、
壽百二十七八十者猶以為夭、

○後漢書曰、胡廣傳ニ時年已八十而心力克壯、繼母在堂朝夕瞻省傍
無几杖云々　注大尉胡廣ハ所患風疾、休沐南歸、恒飲此水、後疾
遂瘳年八十二薨也　此注ニ荊州記を引つゝ　又ニ菊水のあるハ
濡陽縣のあるとさうハとせまし

○夫木抄　廿四
もろ人も齢はのへてむすふ也まつの川瀬の菊のしたみつ

芹つみし昔の人の事

○列子　宋國有田父、常衣縕黂、至春自暴於日、当爾時不知有廣夏隩室、緜纊狐狢、顧謂其妻曰、負日之暄、人莫知之、以獻吾君、将有賞也、其室告之曰、昔人有美戎菽、甘枲茎芹萍子者、對郷豪称之、郷豪取嘗之、蜇於口惨於腹、衆哂之

○文撰　与山巨源絶交書　嵆叔夜　野人有快炙背、而美芹子者、欲獻之至尊、雖有區々之意、亦已疏矣

○更級日記　菅原孝標女
いくちたびみの田芹摘つみしかと思ひしことのつゆもかなはぬ

○雑和集　上　四十石　廿八せりつみし昔の人もこゝろせ

芹摘し昔の人　八十　俊成口傳集

行合の早稲　ゆきあひのわせ

是は説々有　田畔にて左右より寄合たるを云とも見ゆれど稲は風雲によりていつ方へなりとも行方まとて定まれ又彼方こなたより寄合ひて刈は行合なともいへども必民の習はさはせぬものなり是も取べからずとかく刈行事そしけれど刈ひ稲穀し今思ふに早稲は秋の森両々ちへは必すえ出穂も寄かや刈稲けんる事をひ早るとのなれはたゞくは今俗に永楽小いせるを云ふ早稲の種を植うに今年は永楽は五月作り小笠抽も五月はかり作りての元稼云ひも其わそれ行合にあり見は永楽の早稲を八三月作りての元穫七月には中にも晩稲抽もあり植めといふは是早の方言もまた更之是すた入公事すえしれ又案に万葉集を九行相坂を読る歌は紀伊国く在地名之さうくは只地名を申すといふにや

○万代集　仲実朝臣　○夫木廿七　子苗

いそけたこ田子紀念のわたのふし川ゝ麻須香井衣ゝしふつも

○新勅撰集　恋一　清輔

おのつからおのつから紀念の川せ越かつてめたえし人ゆゑやはたさく

○万葉集　九　紀念坂紀伊　出磨

紀念の坂のふもとに咲きをせる桜乃花のにほひもいかに　をみせんこゝろ

同十

いさも子に紀念の川せ越かへり付　みさくはきしも萩の花咲、

紀念子稲　家林枝葉

夜

伊勢の濱荻

○雑和集　上　古左

神風の伊勢の事付ちま荻ゝ　すそ河ゝ

結松の事

○万葉集仙覚抄第一　中皇命往于紀伊温泉之時　御歌

君か代も我世もしれや岩代の岡のかや草をいさむすひてな

此歌も有馬皇子の岩代の松枝結ひ給へりけるを本縁として
読しめ給へる歌と見えたりかの本縁ハ孝徳天皇と申ける御時
の位を去り給へんとせける時に有馬皇子の位を争ひ給ふ
しき事を人知りて讒り給ハさりけれハ世を恨て
うれへりきあひて岩代といふ所にて松の枝を結ひて
いはしろの浜松かえを引結ひまさきくあらハ又帰り見ん
とよミ給へりけりされハ又后も君か代もしとよミ給へ
るなるへし

岩代の松　卅八　俊頼口伝集

岩代結松云林拾葉九

浮木 新林拾葉十

三角柏 新林拾葉九

紅葉の橋

○拾玉集 一秋

たる川乃けさの渡ハまさるらん紅葉の橋ハいろやまさらん

このまゝに
栄えて咲やこの花といふこゝろ流を物く八かきうちて
○雑和集 上 廿二右 十一 この花之支

柳葉に歌書て流せしる年中行事歌合判詞又 十四ウ 六ウ又
えられと未詳の古事 未考

○梂説 顧況嘗於御溝水上得桐葉、有詩云、一入深宮裏、年
年不見春、聊題一片葉、寄與有情人、況復題葉於流泛之
後十餘日、況得詩、若荅況者

書紅葉
聴雨紀談 明都穆 事類の参文書 紅葉之鄭、参有虞後有谷
とあせり 然れハ鄭氏の古事なれとも 鄭虞と鄭谷と二人
まて後も参後有虞同事なるらすや知へし
年中行事歌合師説為字所
云考乃家にの本に書より

信田森　木ゝ事　志のたのもりれ千まの木

○六帖

和泉なる志のたの森れ楠の木れ千枝にわかれて物をこそおもへ

三輪の山志るし　の杉乃支

○新林拾葉集巻九　三輪杉

○雑和集　上十右六　志るしの杉之事

○宇津保物語　吹上巻

いくたひら踏ならしけん　三輪の山杉可るかど尋ね　物かたり

○六帖

わすれすハ尋ねもしてん　三輪の山　志るしゝて杉　杉ハありしを

○古今六帖
峯の雪 谷の氷もとかれて なえしのひき 三輪の山もと
返し
三輪乃山しるしの杉も見えぬまて霞やつむ雪や絶てや(ぬ)ハ

○凡河内躬恒集
雪のうちに見ゆるときは(喜撰元)い 三輪の山やとのしるしの杉ぞありける

○素性法師集
我やとハ松の葉さえて三輪の山本こそ松も生そかけれ(かイ)
されは夫木抄にも松の題にて六帖素性法師とて出せ
是も今本の六帖には見えす

○夫木抄
花さかし使まつらふ我やとに 三輪の山もと霞のうち(家集)(公任)

○源順集
ともしけ人ハまつやと霞みて我をたつる三輪の山もと

○紀貫之集
いにしへのことをたつねて三輪の山こゆるしるしハ杉にそありける

○伊勢女御集
わかれにしいかにもよし三輪の山杉のすゑまハ雪そ降りける

○
敦忠集
三輪の山かひなかりけり我宿の入江の松ハさらやしてまし

○藤原元真集
三輪の山しるしの杉も枯すてて あまた世を我ハさて見つる
雪ふれハまつそ見えぬき三輪の山しるしの杉も見えすとそいふ

○夫木抄　現存六帖
つらゆき立よりて何やさハ三輪の社のしるしなるらん

○紀貫之集　四月あふひのまつりのつかひ
いつれをかしるしと思はん三輪の山ありとしあるは杉にそありける

○獣部

ゐ找 牛とよむ

○新和集 上 廿三右 十二うまをうしとよむ

鹿とさしてむまといふ

○新和集 上 廿五左 鹿をさしてむまとよむ

○新延碎和集秋　康
康の音ハ秋を照しむ猿丸の啼れさこ川名ハいくらや
自江荊州記云　三峡猿鳴至三声聞者皆涙　張説
詩　江路断腸猿
菱野康　秋　新井於葉之　廿三

○鳥羽くのきし文字のゝり
○日本紀
○堀河院右部百首　人不知恋
我恋ハかゝるえにくとのをれう川さ夜行ハきゆ人もなし　殷季
○拳白集　中秋月　長嘯
月清く夜をうれ鳴鳥羽さかく玉章も今宵こそ見め
○雑和集　上　廿六左　十五鳥羽くことのをれ事

鷸の羽乃文字　家林抄葉八

鴫の羽掻　榻の端書

或書云是ハ本榻の端書百端書と云れる事ハ不審して鴫の羽
かき百羽かきといへり鴫の羽乃味到て高くたてる故車の榻
よ來し付たるに似たりと云より　家々に派あるハしぢたてる榻
の端書と云り　深草の少将と云人ありて小野小町に九十九夜
通ひたりし始めいふ事遂にかなひて　或古抄ニ京に有て皇
の御宇ニ　男ありて逢近きに有ける　女を思ひ悲く九十九夜通
ひてその夜の数を車の榻にきざミ付たりといへり　又藤原定家
ニハ淳和帝の御時良岑の宗貞といふ人并自身の右大臣の娘
ニ百夜通へき事をのせたり　古今集に
暁の鴫の羽掻百羽かき君か来ぬ夜ハ我そ数かく

○続国集
さゝ波やくらのとまより出しきしほかまの百羽かき千鳥啼の羽風さ
此歌 夫木抄 古く出して 詞書 志賀の浦にやど
てとそ

秋林拾葉集八

○白氏文集三 新楽府 五絃弾 第三第四絃冷 夜鶴懐子籠中鳴

○夫木抄廿七 従二位 氏
子を思ふ鶴もまよひし塩竈のことゝかれの松の友鶴

○拾玉集七 暁文鶴
籠のうちにおのか毛衣霜さえて子を思ふ鶴の暁の声

○文撰 北山移文 孔徳璋至於還飈入幕写霧出楹蕙帳空兮夜鶴五臣本作鵠怨山人去兮暁猿驚

秋野子鶴 おすゝ

○山鳥のをろ尾乃鏡の事

○南康記、龍南帰美山高数百丈、遠望嵯峨有水出焉云々復有石室色如黄金、有鸜鳥形色鮮潔、自愛毛羽、其隻者或鑒水悲鳴自絶方知孤鸞對鏡為不虚矣

○庾開府集 後周庾信文集
鏡賦 山雞看而獨舞、海鳥見而孤鳴

○續後撰 十五恋 行念法師
山鳥のはつをの鏡かけてのみるにわかれのかけ哉、恋つ

山鳥鏡 六十二 俊頼口伝集 山鳥の鏡 家林拾葉八

○俊頼集
山鳥の初尾の鏡かけられて影だにみぬ人そ恋しき

○異苑　罽(ケイ)賓王一鸞、三年不鳴、夫人曰聞見鏡(類イ)則鳴、
懸鏡照之、鸞睹影悲鳴、中宵一奮而絶、

○雅筵砕狂集　秋　芭蕉
山鳥のをろをろとなる芭蕉の葉末の窓の鏡
とふみよ

当年不如帰口　俊頼に傍集

鵙(モス)ハ郭公鳥の履縫ることといふなり
むかしの世に百舌鳥ハ郭公の沓屋にてありしか、その價(おいて)及ばよ
よりて今の世までハ百舌鳥ハ鵙の草茎とて性をとりて時鳥
はむ也　郭公ハ其沓代を返せぬまゝよりくるしみなきて咽喉
より血流るといふハ童子のつまよりの譬話なるまゝなるをも
古へより云しや新撰万葉集にみえたり　又その説と云
まゝ月令の候にも時鳥草茎のなりハ入る

○新撰万葉集
郭公(ホトヽキス)鳴(ナキ)立(タツ)春(ハル)之(ノ)山邊(ヤマヘ)庭(ニハ)皆(ヽ)直(ソツテ)不輸(イタサス)人哉(ヒトヤ)住濫(スムラン)

○河社　契沖　鵙ハ昔郭公の沓ゆひにてありけるよし世の童を云へ
けるを説と云し　今川ていさきぬ人とハおもてをとりかへ

鵙の草茎　夫木抄第八

ねのくさ、しぎくさ　鴫草　附

○夫木抄春　花　家集花十首中　修理大夫顕季

今ハまや咲てあらん桜花しぎの草ぐさかへるまで

○同八　五月雨　大納言通具　○千五百番歌合

五月雨ハなのミし聖へてあふれていたらん鴫のくさぐき

○六百番歌合　隆信

西就をとひ三五信聖て房まて行へもしらぬ鴫の草くき

所ハ芦をとひて鶴出て流るゝ

○夫木抄五　天仁二年十月頼季仁家歌合　珠賀法師

まさかもしき芦を喰てや鳴らん宿の上ちかく所をゆかる

芦を　鵜所　寄林抄　口秋　廿四

鴫羽掻

搨鴫書

和歌初学 辨説抄ニ出

鳩吹

○拾玉集 一 夏

さゝれの陰しむ宿に いつまで住まむ 鳩吹秋の風なりけり

鶏の歌合の哥

○新和集 上 十八左　九 鶏のせきあひの哥とし支

令鶏

今の世ハ禁庭八月の牝苑の作り物のほか神事祭礼の作り物江戸山王祭礼の出しの一番の作り物ハ鼓の上ニ鶏のあるハ是諫鼓苔深鳥不驚の意より出たりと云るなるへし 聖代をいはひまいらせしするさまなるへし 而古ハいはゆる事なきをたゝえたる此方の上世にありて唐の制度をもうつされしなれハ是もその比よりの物なるへけれハ恐らくハ令鶏の作りたるものまてやあるへき金鶏ハ赦書ある天下大赦の事の時に出しし作り物なれハ是ホ 聖代の恩仁を仰きまつるの意なり出しまやあるへき今その事をたてまつりたまへる人好む所ありて先つ唐の封演か聞見記をみんしその外通考等もみるへし

○封氏聞見記巻四　金雞

國有大赦則命衛尉、樹金雞于闕下、
武庫令掌其事、雞以黄金為首建之于高橦之下宣赦畢則
除之、凢建金雞則先置鼓於宮城門之左、視大理及府縣徒囚
至則搥其鼓按金雞魏晋已前無聞焉或云始自後魏、亦云
起自呂光、隋書百官志云北斉尚書省、有三公曹赦則掌建金
雞、蓋自隋朝廢此官、而衛尉掌之北斉毎有赦宥、則于閶門
前樹金雞三日而上、万人竟一作競就金雞桂下取少土、云佩之日
利一作又云日利日一作官数日間遂成坑、所司亦不禁約武成帝即位大赦
天下、其日設金雞宋孝王不識其義問于光祿大夫司馬膺之曰
赦建金雞其義何也、荅曰按海中星占天雞星動、必當有赦、由是
王以雞為候、其後河間王孝琬為尚書令、先是有謡言河南種穀
河北生白楊樹頭金雞鳴祖孝徵与和士開語孝琬曰河南河北
河間也金雞言孝琬為天子建金雞也、斉王信之而殺孝琬、登封

嵩岳大赦改為万歳登封壇南有大槲、樹杪置金雞、因名樹
為金雞

守宮虫の類　　いもりのしるし　　虫下

○下学集上守宮本名蜥蜴也、取蜥蜴飼以丹砂體盡赤時搗之塗宮女之臂、若有婬犯、則其血消滅故守宮名也、古詩曰、臂上守宮何日消、鹿葱花落涙如雨　鹿葱亘男草也

○

めくものかきるきかくかきるゝハやもりのしるしかひやなきさん

或書云壁虎龍盤魚とはいもりを訓りその血を云て女の身にほれハ洗へとも落ぬす婬事の姦ありハたちまちまけ落るなまるしとすまて女の家屋をやぶるなまもりとはるいもりのしるしとも云へり　附南子

博物志に出しり

○赤染衛門集一　まもいひそる

虫の血を付けて身にハつくなるを思ひとめつるもの　たくさえし

出る所のなきもいふそへハる所につらぬも思ひもるも

○懐中抄百首　神祇ノ部

君かためつくる守宮のしるしはやく思へは袖のいさめなり

○唐詩類花百卅九　河陽詩　李商隠

巴西夜市紅守宮、後房點臂斑斑紅、云々

守宮血　六　翰林拾葉　九

いもりのしるし　五十七　後撰口傳集

盲亀浮木

盲亀ハ大乗本生心地観経巻一ニあり

○拾遺集廿　哀傷　女院の御八講捧物にかねして亀のかたをつくりてよみ侍りける

こふつくす（業尽）みたらし川の亀なれは　法の浮木にあはぬなりけり　斎院

○夫木抄

波の上に出て　かゝる亀山の浮木御たまれつくましくやハ　公任

亀背山

〇夫木抄 廿三左

わたつミの底まて根さゝぬ浪清ミ亀の背中につれやちかけし

龍門の流れのぼれる魚の事

〇辛氏三秦記曰、河津一名龍門、水険不通魚鼈之属莫能上、江海大魚薄集龍門下、数十不得上、上則為龍也

〇後漢書五十七李膺傳、是時朝廷日乱、綱紀頽弛、膺獨持風裁、以声名自高、士有被其容接者、名為登龍門〇注龍門河水所下之口在今絳州龍門縣

故事
浦嶋子巻 二

○日本書紀 十四 大泊瀬幼武天皇 雄略 二十二年秋七月丹波國餘社郡管川人水江浦嶋子、乗舟而釣、遂得大亀、便化為女、於是浦嶋子感以為婦、相逐入海、到蓬莱山、歴覩仙衆、語在別巻

○續日本後紀 十九 嘉祥二年己巳三月乙卯朔庚辰、興福寺大法師等為奉賀天皇寶筭満行四十、奉造聖像三十躯、写金剛壽命陀羅尼経三十巻、即転讀四万八千巻、竟更作天人不拾芥、天女羅拂名翻擎御薬、倶来祇候、及浦嶋子暫昇雲漢、而得長生、吉野女眠通上天而来且去等像、副之長歌奉献、其長歌詞曰、日本乃野馬臺 註 国遠云〻 中略 大海乃白波開 丘 常世嶋國成建(ナシタテ)天 到住美聞見人波万世能壽(イノチヲ)遠

延(ヘツ)倍津故事尓云語来留澄(スミノエ)江閲(縦)釣世志皇(キミノ)之民(タミ)浦嶋子加天女
釣良礼来五紫雲立引五片時尓将(ヰ)五飛往天是曽此乃常世
之國度語良比五七日経志加良元限久命有志波此嶋尓許曽有
介良志云々

はしめにいへるハ万葉集にみえたれと大日本紀に見え思ふま
仍て和歌を記す万葉集長歌ハ他にもあれハ略之

○万葉集第五十六号詠水江浦嶋子一首并短歌

浦嶋子第八十一俊頼口伝集

○新和集中巻上　口浦嶋子画之事

○小大君集
我やたのしうら嶋のこか玉くしけもたりし袖のそらたきものハ
あけけ袖より雲のたちのほりその煙めかるなりさしなれ
へし
あまさこそつゝみたりけれ明のとも羽ふたつやしめりけん

○源信明集
なつのよもまたの板屋いふつゝよそにて年へさりしあけぬらん

○万葉集九

○
すみのえの浦嶋の子ハかへりきてこやの山ハ常盤なるへし
　俊成

○後鳥羽院御集
るくもれハ松の木陰くれのつゆもつるき浦島の神

○東撰集 七 かくてまつりて後なる事かえしらずよ秋
るくのこ 来て暁まいとしく咲きまた一は京くなりて
出かへとめて手箱のふたに菓物を入ておこせて人妹
いとかく成りつまはありしたゞく思てつるまくいひ入れ
そのふたにかきつけてやりし
かけはるとしやき　る　浦島のこはいつまの心ひそ

○後撰集 十五 雑一 元良のみこ乃侍まへりける時まさなり
まに入て侍りける箱よりあるへん下帯して出して又こん
時にかんとて物の上におかさしおきて出侍りけるのち箱のさき
らの親王とりかくされて月ひ久しく侍りて来て
帰りてこの箱返し元良のみこのもとにとて　中務
あけてにたるかへはせんかの江の浦島か子我思ひやら
俊頼

○夫木抄 廿三
うら島が成りけん七貝箱のあけのこむかしと思ふて

○くゞのふき

○清少納言記

孔氏倒

○蹄座記 五 去年頼綱の和歌舞ゝ所ゝ祭ゝ申し何やらの
くのたかれよ事にもちやと祝云をそやける

竹取翁　家井拾栞十二

○荘子巻九盗跖（跖）孔子与柳下季為友、柳下季之弟、名曰盗跖、（跖）盗
跖（跖）従卒九千人、横行天下、侵暴諸候、穴室樞戸、駆人牛馬、取人婦女、
貪得忘親、不顧父母兄弟、不祭先祖、所過之邑、大国守城、小国
入保、万民若（苦）之云々　跖之為人也、心如涌泉、意如飄風、強足以拒
敵、辨足以飾非、順其心則喜、逆其心則怒、易辱人以言、先生必
無往、孔子不聴、顔回為馭、子貢為右、往見盗跖、盗跖乃方休卒
徒大山之陽、膾人肝而餔之、孔子下車而前見謁者曰、魯人孔
丘、聞諸軍高義、敬再拜謁者、謁者入通、盗跖聞之大怒、目如
明星、髪上指冠、曰此夫魯国之巧偽人、孔丘非邪、為我告之、爾
作言造語、妄稱文武、冠枝木之冠、帯死牛之脅、多辭繆説、不
耕而食、不織而衣、揺脣鼓舌、擅生是非、以迷天下之主、使天下
学士不及其本、妄作孝弟、而徼倖於封候富貴者也、子之罪

大極重、疾走帰、不然我将以子肝益晝餔之膳云〻 孔子再拝
趨走出門上車、執轡三失、目芒然無見、色若死灰、據軾低頭、
不能出氣、帰到魯東門外、云〻

吉野柘枝仙女 ツミエ

古へ吉野山ノ柘の仙女といふことのありし、万葉集第三
ニ哥三首あり 懐風藻ニも 詩三首あり その外ニも 吉
野の詩数首あり 皆仙跡のことを 作れり 万
葉集ニ吉野人味稲といふ人柘枝仙女ニ逢しことありけれ
を或人ハ字万之祢と訓へきよし いへれと今案ニ懐風
草の詩乃落句ニ美稲同義稲津と作れるハ美稲
そのまゝ味稲を略して与之乃と訓へし 稲をハ祢
の一言ニ稱し乃ハ又略之へる訓之

○万葉集第三 仙柘枝歌三首

霰零吉志美我高嶺乎、険跡、草取可奈和、妹手

乎取、

右一首或云吉野人味稲与柘枝仙媛歌也、但見柘

枝傳無有此歌

此暮柘之左枝乃流来者梁者不打而不取香聞将有、

右一首 此下無詞諸本同

古爾梁打人乃無有世伐此間毛有益柘之枝羽裳

右一首若宮年魚麻呂作

○懐風藻 従三位中納言丹墀真人廣成三首

五言遊吉野山

山水随臨賞、巌谿逐望新、朝著度峰翼、夕翫躍

潭鱗、放曠多幽趣、超然少俗塵、栖心佳野城、尋問美

稲津

七言吉野之作

高嶺嵯嵯多奇勢、長河渺漫作廻流、玆地超潭豈

凡類、美稲逢仙月水秋、

○従五位下鑄銭長官高向朝臣諸足 一首

五言従駕吉野宮

昔昔釣魚士、方今留鳳公、弾琴与仙戯、投江将神通、柘

歌、従寒渚、霞景飄秋風、誰謂姑射嶺、駐蹕望仙宮、

○續日本後紀十九 嘉祥二年、己巳三月乙卯朔、庚辰興福寺大法師等為奉賀天皇宝算満于四十奉造聖像三十軀、写金剛壽命陀羅尼経三十巻、即轉讀四万八千巻、竟更作天人不拾祢、天女羅拂石翻擎御藥、倶来祗候及浦嶋子暫昇雲漢而得長生、吉野女眺通上天而来且等像、副之長歌奉獻、其長歌詞曰、日本乃野馬臺ヤマト能国遠云之然礼度モ世之理度歓之春尓有介利何志乙帝之御世遠、万代尓童祢飾乙奉令栄度、栢之枝乃由求礼波佛許曽顧成志多倍云云三吉野尓、有志聽志天女来通乙其後波、蒙譴天昆礼衣、著乙飛尓支度云、是亦、此之嶋根乃人尓許曽有波度云那礼
云云

此歌によれは吉野の栢の仙女人間に往来せしとみゆ
かの吉野の人を栢といふなるへし さてこの夏の上に
浦嶋の事をいひて流江の事をせるの次に此事哉
出て此嶋根の人こそあれといひたれは是も仙女の
在りの人のよしなり 吉野に在し云
陽て存れとも浦嶋子も丹波国の人なれとも仙江のる人
ある所なるへし

上総玉　末珠名娘子　まゑの たまな

上総国末の郡に珠名といふ美女のありしとき
聞に以名を聞ける人のことゝ見あるゝされども見知るは
後世も人多く云知れも珠名の事ハ万葉集に
見のこりて一向人のいはぬことなり上総国のことなれば
今ハ和名抄に周准郡といふ

○万葉集 第九 十七丁 詠上総末珠名娘子一首并短歌

小野小町髑髏

小野小町の死て後その尸陸奥国八十嶋にありて歌を詠け
ることを在原業平朝臣たりけるが付句つけて其の歌の末を
有るよし江家次第の裏書にみえたり これより後さ陰
くいひ出る事どもあり

○新和集 上 卅三左
○鴨長明無名抄 上 廿六 いふあなめ〳〵の事 小野小町が事

玉泉坊花之歌の事
○新和集 中 六右 又玉泉坊花歌之叓
ときのこもれけるを 歌林拾葉 十二
承友 歌林拾葉五 秋 載安次
清水寺歌 七十二 俊頼口伝集

伊勢人のひかこと
儀字歌に伊勢物語の事をよめる所に伊せハ僻とかきなしとて 坂口の流
例年の様に云なるハせりけるふるき説ありてあへし
百首の中池の題にて菱原忠房
いせなるハひがこととそ思ハれし 大和なるてふみまきの池
かくつゝ見るその世の読なるハかく歌にハとり入られまじきにか
すてに古代りのなるなれハ用ひられし 始へしましき 聞ゆ
法師の歌にも
いせ人ハひか事をありさく 集の中にハうたて案すれ
是おとなりそのぬれ共今更何のなりとも見えすさらに或人の
云けるは清ていはハ二説あるへし 一つハかの無文の花されけるに
その御まて東屋のわさ歌まそれとハさうで伊勢人ハひか
なきりとうひけ又後まても読て後人しりや文伊

勢や日向の物語とて二たりの玉乃人一所に住けり
昶の移りかはり侍れは伊勢人は日向日向人はいせ行さ
まかりけるのちはうるのるをや偽りといふらん是その中
秘玄の事共は物語に侍れは似つかはしき所侍らんと
えうほさまさする事也 一 猶又再考へし

卞和か玉を献る
○唐詩類苑 百四十一 琴操曰、卞和得玉璞、獻楚懷王、王使
樂正子治之曰非玉、則其右足平王立復獻之又以為
欺則其左足平王死子立、復獻抱玉而哭、繼之以血、荊
山為崩、王使剖之果有寶、封和為陵陽侯、辭不受而
作怨歌

韓昌黎潮州に謫所して愁苦したるにて韓湘ヽ何らへ一詩
先非の一絲を絶ゆ
一封朝奏九重天、夕貶潮陽路八千、欲為聖明除弊事、豈将
衰朽惜残年、雲横秦嶺家何在、雪擁藍関馬不前、知
汝遠来須有意、好收吾骨瘴江邊、

橋中仙人象戯
画家に伴ふ所橋中の仙人を画て囲碁かくる絵を何れも世にも
碁をかくるなりと云り然ども其文にあれば囲碁にはあらで象戯なりそ亦
文に云巴邛人家有橘園、因霜後諸橘盡收餘、有二大橘如三四斗
盎、擘橘輕重亦如常橘、剖開毎橘有二老叟、鬚眉皤然、肌體紅
潤、相對象戯、自僅尺餘、談笑自若、剖開亦不驚怖、但与決賭とある
象戯なるを囲碁と作し　小窓別記二　○列仙傳

山田の僧都のうた　十六ウ

これを世にハ案山子の事として田畑の中に立置くものと思ひ
ねとおもふ人もありこれハ古事記の山田之曽冨騰より轉りし語
こそあるべし

○古事記上 久延毘古者於今者山田之曽冨騰者也 此神者足雖不行盡知天下之事神也

○下學集下 僧都 在秋田驚水鳥器也或擣米器也備中国温川寺玄賓僧都始造焉故世俗名之謂僧都或説曰有倭歌又曰世話者謂之兕鼓云々

小田僧都　言林枕榮 十

山田の僧都乃事

○桐葉集 一名玉露叢 僧都のうた いろいろの説あれども僧都ハ田を守るものにて 秋に稲しける連歌の制に定めたり 但し論にあらず 山田もる僧都の身こそ哀なれ 秋はてぬれば問ふ人もなし 古今集の歌 [illegible]ねさへかゝしを僧都と思ひて名得たるし 僧都ハ極めて深秘 田へ水を入る事也 されハ深き之川ハ水之大事の秘説なれども 此事記 [illegible] これを玄賓僧都の秘事に [illegible] いひ [illegible] といへり 古信用 [illegible] 説之 古今の歌に 足曳の山田の僧都おのれさへ我をほしといふ [illegible] 玄昭か此歌を詠して僧都ハ田に立る驚かし人形之と いへり 又或抄に此歌の [illegible] 我をほしといふ これハ [illegible] 又秋六帖僧都の歌に

秋ちかき山田のしろの霜かれて立僧都のたゝすまゐや　衣笠内大臣

いかゝせん刈果僧都ハつゐに立かひもなき世をふる身ハ　為家

里遠き山田の僧都ひとりたに残りとや驚かすらん　知家

人知らぬ山田の僧都さのこやハ立すかきても世をは過さん　行宗

今ははや山畠に立僧都かな秋をそめぬき世をはへくふかの　光俊

とこそよまれ其の言たかのなすのこやと云たてるかゝみすといひ記

うるふといひ立すくえと云ることなきをのる板にせしとハ見て也

そ僧都ハかゝしに何かをしてある鳥板といへバ鳴子ハ誤り

とや世人案山子ハかゝし　ハ東山子と出て　人形之僧都ハ人形を云板の

事とも説るへし　古来の言傳ゆ或ハ後人の申傳ゆなるへき之

○後撰集　又　秋上　ふるさとの男にものいひける女のひとりおほつき

まかりけれハいまひとりいひつかはしける　読人不知

ありしにまさるたのこを　かけせて秋そ我身の身こそなりぬる

返し

かりそめに山田のひつちかハ君ますかしにねてかゝる人も有

同　十三恋五　男のもとにいひつかはしける女の田舎の家にまかり

てなむまかりけれともゆつけりやまなん門もたゝすなりにけれハ田

のほとりに住のなりけるをとりて

足引の山田のそほつうちわひて　つの声をそなける

○或出云或説に昔玄賓僧都案人形を作りて秋田の中に立て
鳥の穂を啄を防りし其僧の威とし以て後人是を僧都と名付
是玄賓僧都に始まれりといふ云々按ずるに此説是とし似
たり一変せず或ハおどろかしといひて累ぬる人形をも云又ハ
とどろきの鳥縄なんどもいふ右之説不用そのかづハ案山子の威
よし何れも田よりのを保る色之ありて保るの之枝をもて抜く
たる物之信て秋之稲之様之二句佐る案の稲之ハ不帰信
鐘に云古今集の山田もそほつの身こそ出しかれと云字をお信
なる人ハ案山子の威をなすとつゞく是へり謂之と云く此字の云
秋も果行時なりて保ぬのかたの用なく捨置されたるを云
賓の我身となりて秋果ぬれハ問人もなしと讀る之と師説之

○或云古今集に足引の山田のそほつおのれさへ我をほしといふなれハ
しきことうれ今案ずる曽冨騰ハ古事記上巻久延毘古者於今者山田之
曽冨騰者也此神者足雖不行盡知天下之事神也とみえし翻此
字のそほつと古記云玄賓僧都初てそほつを借て鳥を驚さと云く
僧都を以て名とせハそほつと云ふしそほつと生れハ必案子なれそほつ
義を神代紀の或ハ無賤にまて神号とするなるへし なる所僧都も
まいりき之又古板以曽作首雖元に集此形を引用なる則次此
本説今の本古書にあらず必矣足人所ハ例の謬勞之云帖そほつの説の義云是
ほめれそほつを以為猶同

難波芦刈男

芦苅の男乃事ハ伊勢にも芦屋にかつといふ人あるよしのこと
ものの事物にみえねど此事ハ大和物語に出てされたれ
姓名ハなし

○六帖
津の国乃こにすみありては難波ぞ何かりさすそれ人く
かしらふ

あまのさかて打事
この事にの或説ゝかくいへど或人云海人の海へさづけんとする時
ほを舟へいれぶし頼つゝやすみしとまとハ読あるぞ後人かいや
まはのさるぶし後手うる様く何なれハあらいふもそのへするもの
のおハ神事ハ祈禱るとにおハあるなど逆手ハ呪咀るとにおハ凶事
なる事あるへし

○古事記上 大国主神答白之、僕者不得白、我子八重言代主神是可
白、然為鳥遊取魚、而往御大之前未還来、故爾遣天鳥船神徴来
八重事代主神而問賜之時、語其父大神言、恐之、此国者立奉天神之
御子、即蹈傾其船、而天逆手矣、於青柴垣打成而隠也 訓柴云布斯
○同上 是以海神悉召集海之大小魚、問曰、若有取此釣魚乎、故諸魚
白之、頃者赤海鯽魚、於喉鯁物不得食愁言、故必是取、於是探赤海
鯽魚之喉者有釣、即取出而清洗奉火遠理命之時、其綿津見大神
誨曰、之以此釣給其兄時言状者、此釣者淤煩鉤須須鉤貧鉤宇流鉤

釣ト云而於ニ後シリヘ手賜ヘ云

海人の逆手云井於柴　十二

○伊勢物語　九十六　昔男有り　女をとかくいふこと月日へにけり　女
石木にしあらねハ心苦しとや思ひけんやうやうあはれと思ひけ
りそのころ六月の望はかりなりけれハ女身にかさひとつふた
つ出きにけり女いひおこせたる今ハなにの心もなし身にかさも
一二いてたり時もいとあつし少し秋風吹たちなん時必す
あはんといへりけり秋まつころほひにここかしこよりその人
のもとへいなんすなりとて口舌出きにけりされハ女のせう
とにはかにむかへにきたりされハこの女かへての初紅葉をひ
ろはせて歌をよみてかきつけておこせたり
秋かけていひしなからもあらなくに木葉ふりしくえにこそ
ありけれとかきおきてかしこより人おこせハこれをやれとて
いぬさてやかてのちつゐに今日まてしらすよくてやあらんあし
くてやあらんいにし所もしらすかの男ハあまのさかてを打て

ちんのみひとつちるむら河はさへ人のおもひ草ハおもふとも
まや何らんおもはぬとのまや何らん今こそハえぬとそいふなる

○拾玉集 元名拾遺愚草
ひとつの蓬のさら紙河へ入本葉陸しく流れも那し

○六百番歌合

寄海人恋

秋こひハ海人のさりてをうちかへし思ひこそすれや世をも恨ん

藤原兼宗朝臣

蜑のまてかへ　あまのまくかさ

○後撰集十三恋五　みまかりて久しくなりける人のもとにつかはしける

伊勢の海乃蜑のまてかたいとまなみながらへにける身をそ恨る

源英明朝臣

○若家

与謝の海の蜑のあまハ乃里てかたをやとらん波のよるなり

和泉式部

蜑のまて　かたく　歌林枕葉

春日野の飛火乃野守の事

○古今集 一春上　詠讀人志らす

春日野の飛火の野守出てみよいまいくかありて若菜摘てん

○飛泊飛火の野守とハ春日野にむかし飛火を立られけるゆへにいふ

ひ野といふ飛火の条ハよあり野守とハ野をもる人之云玉史

ニハ大和国春日野烽をおきて平城ニ返て告セしこの飛火野なる

ハもろこしよりも記されて言き所ニ烽燧立てその上ニ標をさし

もさむいそく事あるハ昼ハ烟をたく夜ハ何んを記し昔中をたく言

よりも勝れよりも来らん夜の煙ハ見えねハ燧火をたけるを見て

事あるをみつきてあつれん料之それを飛火といふもの也仕をあけ

後ニハ火の飛やうに見ゆるともいふ文つけたる火緒アるつけて先帝

を火の飛ともいふたとへバ元慶ニ立られて天智天皇の

ありけれバ時之飛火を見つる国ニ所ニ何まいきたれとも返事

まて春日野を飛火野といひならハせり

ミ川まくらといふ事

身體部歯条再出

○後拾遺集 十九 雑五　冷泉院東宮と申ける時女のもとに

ゐ人をたかうしたかきたえとよを伝をさすへくりけれハ

源重之

年へてもすめる清水に影みれはみつはくむまて老にける哉

○夫木抄 廿

清水くみせきとめつゝかの髪をゆふみてゝもさそ川のみなもとまて

讀人不知

同 廿

賀茂山の岩のこしかけむすふまにことしもみつはくむまて見ゆる哉

賀茂重保

野中の清水乃事

○拾玉集 六 秋

宿かりつるそのやとり野中にぬれと月代清水ぞすみける

○夫木抄 四　前摂政家三首歌 野外花　為家

春風に野中の清水すゑまてむすへるものゝ花ハありけり

同　定家卿家歌合花　従二位家隆

桜さくしみつのなかれも野中の清水花そうつりぬ

耶ら読 廿九　倭類口傳集

○蜿蜒（ゑゑ）のこゝろふき
中古の人の詠くしに 蜿蜒の人のおもふだに人に隠せんと思
ふ所ハこゝにはより霧をふき出しそのまぎれにかくれてとしく
てこれハ仮るはてまうしく 蜿蜒の人ゆる事 七トをと云事を
これハ分述るを隠るゝ人ハまる事をまくし それを云まゞく
なる者くし 南ホハこゝをく隠るゝを たてまつりぬれハそ
きをつん気くし 又 筆 ゆうするもうくり

○後漢書 廿六 張楷傳 楷復告疾不到、性好道術、能作五里霧
時関西人裴優亦能為三里霧、自以不如楷従学之、楷避不
肯見、桓帝即位、優遂行霧作賊、事覚被考云々

伊勢や日向乃物語
いせ物語の注などにある文句
○新和集　中　八右　七　いせや日向の物語といへる

人に忘られハ侍る　詞の例なく事
○後撰集　十三　恋五　とまれと云ふ男の　出てまかりければ
読人不知
志ひて行詞のかりそ　摘をみたると　我宿にはさまりけん

○おきの火彼ハ忘れし人ニ何ゝ給ふ事
○源信明集　冬のよに忘れし侍るころ
手まさぐる火桶のおきやかてゝ忘れし人ニ何ゝ給比ゑ

枕さだむる事
忘れし餞夏つくとて枕さだむる方を定むるのさまハ字ハ
さるゝ人を夏つくし侍る思ふその時よみてかへる枕ハゝ
さるゝ時こそ人をいひつくしと侍るひとよりも思へし

○後撰集十恋三　読人不知
夕されハ我身のみこそかなしけれいつれの方ニ枕さためん　兼輔朝臣母

名見

○夫木抄

名に寄る かゝ見す婦見られつゝいつはもう清水の影

常陸帯　ひたちおひ

○拾具巴國記中　常陸國山田農場とふる山伏の坊にやとりてよめる　常陸帯　土　家集在

かくまてくるしい河川まの常陸帯むすひそへてや契りせん

常陸帯卒一　後類從集

○散木集

つかのまも思ひたえぬるに手をふれ康婦の帯の中ハ絶せし

井手下帯　宗恭祭　十一　井手下帯里
けふの細布　五十七　俊頼口伝集
狭衣返衣　五十六　俊頼口伝集

○詠ず年中行事大全　巻一　正月十一日常陸帯の神事　常陸国鹿
嶋大明神の神事也　神領ハ二千石之　御朱印の御座　本社
ハ宮ハ三百石御頂戴　惣大行事屋　預り宮ハ二百石頂
戴　常陸帯の別当ハ神宮寺とて百廿六石を御祈祷
護摩堂ハ護国院とて三十石と頂戴　本社并廿人新社
宗廿人并社家社僧其の数を知らず　鹿嶋神ハ武甕槌神
又伊弉諾尊　十握の剣抜払て　かぐつちを斬給ふ其の剣乃
鐔より走たる血そゝぎて　神となる　名付て甕速日神と云ふ
甕速日神の御子を熯速日神といふ　其の御子ハ武甕槌神
なり　女のかたより心に思ふ人をおもひ懸想せられて　殊に恋たる
人の男の名ともを此日神の帯にかきあつめて　神前におく
其の中より神慮にかなひたる帯をとりて　其帯のぬしを聟と縁
を結ぶ也

志のふもちすり　擣衣

○古今集　恋四　題しらす　河原左大臣

みちのくの忍ふもちすり誰ゆゑにみたれんと思ふ我ならなくに

○いせ物語

春日野の若紫のすり衣志のふ乃みたれかきりしられす

○百人一首古説 賀茂真淵 志のふもちすりハ上古ハ忍之て衣に摺

やうなるハ必萱草垣衣月草茅子等成何ともなく

手たる也中比よりハ板に彫のかたちを彫かたきて

上にて摺けれハ絹布なとにかたきの上を文身

て摺れハその色の乱の模様にみたれたれくさるくすべて色を

以て何摺といふやと頭ハ思ひし之出大家集に出るて

たへて白き物紙なきよりて赤らし火串を入て紛るとそ
うちみては思ひ出さし我宿の君か草しも赤れ之けり
尭客の草乃 松 なる色赤されハ此葉ハ君か為にも 元来
多かりて小赤く かくハよめるやと云へりしを 又 延喜式を按
ずるハ小松赤ら小葉赤らなるて何も 何 文 姨捨集に 遊ふ山寺
の物なる衣といふ云ふを一本 赤山 なりとも 又此云ハ 赤山なるハ
おなしくなれとも まつ 赤山のかくち赤れる事も 侍れは 物乃
かくまうし色なるも宜付き成へし と思ひなりぬさらハ かの赤
日脚の前 草紙多かりて 云ふ草のかり 秋赤れは 宜へし
○君か草ハ 和名抄 莒の訓に 鳥蘵 之乃布と いへり 十 色衣 一名 久佐
莒ハ衣とも いへハ ついたるもの出るを以てさる 文字 宜へ
へし 白氏文集 麗山高の吟に 墻在衣 蓬在松 此松 文 莒なり
云ふ草之 文今の俗のいふる草ハ山中にのこ 又 清少納言
云ふなる 新撰乃なりとふに出たるかを かきすくいふ
書ハ昔ハ さらにみえたるへし 今 頃にかな 俗のいふ草の生せ
あるなる されハ 決て 萬葉 右葉の めきゝ 物の 出なし 称なる
新撰乃 に 出たるを 何とかくハ なれなん ○ 又 萱草と 同物
なりと 大和物語にみえたれとも 二つ 和名抄も 萱草ハ草 類に
の文 枕草子にも 萱草の節供 なるよしを 出て 思ふ草に 在
なため をさして 伊勢物語に われ草紙君か草とや
とて 出 なるハ 別物 なりと かまへて いふこそ それ 紙すて 同
物の 説と 並ぶ 也 ○ まつ 赤 文ハ こ と 以て 同 所へ

枕草子に山ちかきてありきもつとめて水干大商と云
たちて思へハたゞ付る物のさまハうるはしく何ゝでもあられぬ
てうつりあまりに無益へし ○狭衣第一に我心もあやしく
ありあまり神すかなへ成いとゞしく ○古へての粧ひ
ハこゝ命とおもへ共此比古條まりて志のやさしからぬ
とは詞ハいと見苦しく されと今ハたゞの御例となりて
やさし これ

志のまめかち染の事

○拾玉集ニ宇治山百首 今不逢恋
恋をのミ志のぶのうちはにかひし神も加護へしとハおもひさりし哉

ぬれぎぬ

○後撰集十 雑一 女の許へありといひけれハ 親聞侍て

まめなれと阿た名ハ立ぬたはれ嶋よる白波を濡衣ま きて

同十七 雑三 なき名立けるころ 読人不知

世と共にあまに濡衣とかるものハわか身後のきする之けり

同十八 雑四 何事かありけんいひさはかれ侍ける此何男の名さ

て何それいふなる問侍りけれハ 小町かまこ

うきことを忍ぶる雨の下にして我ぬれ衣ハほせとかはかて

○藤原元真集

いせの海のあまのぬれ衣きる人ハ袖を思へハのこりさかり

○袖とハ人のこれをいふなりや

○藤原長能集

志るくおもひ立よる 女之 影の数まさハその濡衣をしほれまさん

○拾玉集一 恋

ぬれ衣我きるとしもなきそらにかくるぬれつゝ袖をいとへつさた

同三 右大将家百首當座 百首 雑恋

よし何ハ何もそかすめる濡衣のうらみをふかみつまもみるらん

同又 詞去歳

ありしよ何かをんてこそ忍ひしれなしときつる君の濡衣

くノー 静実

みつくきの行衛のしらまに何かはてあすりろくおちる雲の法衣

○金槐集 中海辺恋
うき身のみ小嶋の蜑のぬれ衣ぬるとないひそ朽なはつとも

○後撰集 第三 春下 花の下まてとまれりける比ちか
をとこの中ける つひてよ 貫之
春されはさくらの花のぬれ衣きぬきたらはうの衣ふそはけ
同十三 恋人を女に相思ひを給ひてけるの女の内侍の子を人伝
ぬれは よしふるの例を
ぬれぎぬを海の雨のおもひたれ身の法衣は ひとつにはし
中将内侍
なき名つゝぬる人のきせぬる法衣は思ひの外に何かはきるらん

○後撰集に ぬれ衣とは つみの家にましへり 雲賓哉 作さん為よ天
の香と山又夏河社と云て かこひをぬりしてきためて六月
の炭つくしの衣裁たりけるに 必そのしるしの見ゆる無実志の不
まとふ即ひるよ すゝ味たる志のかこひにいさゝかなく ひぬをまて
無実を晴すと云ことされは古詞又
河社しのにをりはへ衣ほすひるせなき七ひきさなん
ぬれ衣の袖よりつたふ涙こそなきせぬまての名を名とはれ
なほ紀するのたとへ何ぬれ衣は名をきゝ名のため也

○藤原元真集
伊勢の海の蜑のぬれ衣きぬ人は神もとこそ人は渡りまさりけり

○いさよひの記　阿仏尼詠歌　十六夜の記　暮かゝる程に清見か関すぐ岩こす
波の白き衣をうちきするやうに見ゆるもいとをかし
清見かた年ふる岩に事問ん波の濡衣いくかさね着つ　三川

人に忘られバ下紐解る事

○後撰集九恋一　女のもとにつかハしける　読人不知
人こそハ實なりけり下紐のとくるハまさしきしるし也と思ひしに
結ひおきし我下紐の今まてにとけねハ人の忘るゝなり

○同十一　恋三　女のもとにつかハしける　左京大夫
忘れなんといふさへいまもいとし下紐のとくるを人ハそれとしらなん
読人不知
近
あひ見てもものおもひしときも下紐のとけつゝかくハいかにせよとか
あるイ
あふ代

○衣かへしして寝まハ思ふ人夢むるなり

○後撰 十二恋

志ら露のおきて阿ひ見ぬことよりハきぬかへしつゝねなんとそおもふ

○後拾遺 恋四 清原元輔

なくさむる人ハなくてもよもすからかへす衣のうらそぬれぬる

○小野小町集 ○古今

いとせめて恋しき時ハうはたまのよるの衣をかへしてそきる

○源順集

ぬるよにも衣かへしてまれのよに夢よりほかにやハ君かみえんこは

○蜻蛉日記上

よはさめて近き衣の夢なきたいとゝちかくおもへれそなるらん

又

思ひたつひのはしまとゝいひそふかへす衣のいれもぬるらん

○拾玉集 一 立春
霞へにかひなきを我祈るによのこゝろ我なきたくもり

○後撰集 十三恋中 読人不知
白露のおきてあひ見ぬ事よりハ衣かへしてねなんとそ思ふ

○かゞり ものか さして支 人事 往古 枚条再出

○古今集 十物名 二条后東宮のみやすん所と申ける時めとにけ
づり花させりけるをよませ給ひける 文屋康秀
花の木にあらざらめとも咲にけりふりにしこのみなる時もがな

○古今著聞集抄 一条祇園 めどハ蓍之易のうらなる時に用る筮之けづり花ハ
刻る造り花をいふ

○蔵玉和歌集 朱雀院のみかど院にありせ給ひし 仏名の時
うたかつら花をさして 仏名のあと
手をた 梅ハをれともいろかハ袖の香もうつりぬ

○小大君集 女房ともの仏名にまゐりけるの夜 仏名のまへの夜
あまりたゝよ人とはへりけりそこまかれとせしかハあふをまつ

んと見て読める歌を庭上にさし出たりけるに御感ありたるよしなり
なりけるとぞ
十月ハ神無月をいひ給ふ人為のこともありしとて又め
○今様く小大君の集相模の集なとに仏名の時乃うた
あれハ佛名おこなふ堂をに行しもとありくらし古今
集の歌時鳥なと云々とさたまりぬ
をとこハ苦も因果の事をいひてこれハ佛名の時の歌にや
あらん山もハ暮にハ行しら道成りくしゆ書にハ妻戸
なりとみえも苦ハ信ありと法妻戸をめぐりなるり
ことなし
○宗祇古今集伝授めしにけつり花とハ女を妻を云也妻戸之
事ハ妻戸なり子に卯の花をとりて飾る事何となれバ神秘の玉
に喩てうたへるの伝同ハ妻戸と女根にたとへ陰に比し花を
陽に比して用ゆ天照太神素盞烏尊玉と剱とこれちくへ
まゐるを陰陽和合の言ひ玉ハ温柔にして無二思ふに比せ依し
神慮の和合の理おもしろし

子日玉箒　ねのひのたまははき　袖中事記再出
子日ハ玉箒の事その歌さまさまなれどまてまてにあり
くの説あれど是とハ定めかたし故て今ハ略しぬ
万葉次下にあるを要略にあらはし用へし
○万葉集巻七　正月三日侍従竪子王臣等、令侍於内裏之東
屋垣下、而即賜玉箒肆宴、于時内相藤原朝臣奉勅宣諸
王卿等随堪任意作歌賦詩、仍應詔旨、各陳心緒、諸人哥未
得

○陸佃埤雅　草之多壽者、故字從耆、

○博物志　蓍千歲而三百莖、其本已老、故知吉凶

○史記 徐廣云劉向言亀千歲而靈蓍百年而一本生百莖也○褚先生云蓍滿百莖、其下必有神亀守之、其上常有青雲覆之、傳云天下和平王道得而蓍莖長丈、其聚生滿百莖、方今取蓍者八十莖以上長八尺者即已難得、但得滿六十莖以上長六尺者即可用矣、今蓍刿所上皆不言、如此則此類亦神物、故不常有

○本草綱目　別錄曰蓍實生少室山谷、八月九月採實日乾、此草所在有之、其莖可為筮、秋後有花出於枝端、紅紫色、形如菊花、結實如艾實、

○史記　亀千歲乃遊於蓮葉之上、蓍百莖共一根所生之處獸無虎狼、虫無毒虫

○俊頼無名抄　玉箒とハ蓍と申草に子日の小松をひきくして箒に作りて田舎の家に正月の初子の日子飼屋をはくやと申すなるを其年の年に生れたる女のこがひするに其のはきをとらせて女に名付てそれしてはかせて祝詞にいふことゝそいひ伝へたるとそ本文家の伝へ

○童蒙抄　田舎のこがひする所に玉のやうに光ある実のなりたる松と箒とに作りて正月の初子の日にはくことゝそ

○奥儀抄　玉箒祝の物なり年の始めに人も皆持て何事ハ子日に今のふとしあるとそ

○新和集上 卅六左　廿七　九まてハ右之支

○新林拾葉集第一 玉箒とは蓍といふ草之田舎ニハ今も草を
松まえかくて正月初子のこびはらひをすく所志らいふと
云々 万葉集巻廿 家持 私云 此歌ハ但未奏云々 今案ニ
玉箒を持て作歌賦詩侍とハ是なれとも何物を玉箒と云
ハんとまて此ハ歌の題 蓍の草見 此歌のかく 玉の緒とハ命
をのたまふ也 されハ蓍ニ橋木あらん云々 川書にあらハめてたき
草なれハ祝賀ニ取用ゆる也 一 萬葉抄云 此祝雑信用
玉箒 初子の松まえくてとるハ松みて知し也 揖焉之
奥儀抄云 此説蓍代用ゆるや案之説ニ多けれも蓍の事
を以 玉箒の事とせる 於まや侍ん万葉秘抄も 蓍乃
事とえり 又万葉集古意 緬玉拂潔夫木香稟歎云々
是ハめでの事をもかすそかきこれ かようして 四つ 玉と云ぶ
あノマヽ新不蔵十九

○散木之事
○後拾遺十二之一 能因法師
散木ハたてあらここそくちふりれれ子のなそねのむ(?)ひくれ
○拾玉集又寂蓮入道のすゝ(?)みつゝかえて
君ゆへぬ年ふりよるか家の山路くひ分ず(?)節をそしれ
云し 寂蓮
散木のちりもとの枝なそてしらなるるハこれそこえこえ

散木 巻六 俊頼ハ侍集

無恙　つゝがなし

○輟畊録巻四戰國策趙威后問斉使、歳無恙耶、王亦無恙耶、楚辞九辨曰、還及君之無恙、説苑魏文侯、語倉庚曰撃無恙乎又曰子之君無恙矣　漢書元帝詔貢禹曰、今生有恙、何至不已、乃上疏乞骸骨聘礼亦曰、公問君賓對、公再拜鄭注云　拜其無恙者顧愷之与殷仲堪牋、行人安穏布帆無恙　隋日本遣使称、日出處皇帝、致書日没處皇帝無恙、神異経曰北方大荒中有獣、咋人則疾、名曰㺊、㺊恙也、嘗入人室屋、黄帝殺之、人無憂疾、謂之無恙、爾雅曰恙憂也、應劭風俗通曰上古之時、草居露宿、恙噬人虫也、善食人心、大患苦之、凡相問曰無恙、恙或以為獣、或以為虫、或謂無憂、廣千祿書、兼取憂及虫、事物紀原、兼取憂及獣、廣韻㺊字下云、㺊獣如獅子、食虎豹及人、恙字下云、憂也病也、噬虫、善食人心、是㺊恙二義、神異経合而一之則誤矣

無恙

○文撰 与梁朝歌令呉質書 魏文帝

五月二十八日丕白、季重無恙○

注李善曰、爾雅曰、恙憂也

○かへのおもかけの事

この事たしかにさためし物なし さまさまの説あれとも

こゝに何れとも見えねは おそらくは漢武帝の反魂

香をたきて李夫人の俤を見まいらせしことをいふ

○後撰集 九恋一

駿河

まとろまぬ壁にも人を見つるかなまさしからなん春のよの夢

○大ふ入のふいろといふ事

○中務家集

よしもにとしれんつ　さくめに火もあるも如何に

一火をきらふを忌る事

古之神代に伊弉諾尊黄泉国へ入ましませし時ゆつのつま櫛の一歯をかきて一火をともして伊弉冉尊を見給ひし故にこれを忌て今は四方の人は此事を忌る也たとへは一火とは薪一本にともしたる火を地獄なといふ二本ともしたる時は苦しからさるのよしいふ

○古事記上伊邪那岐命云々於是欲相見其妹伊邪那美命以追往黄泉国尓自殿縢戸出向之時伊邪那岐命語詔之愛我那(十一)迩妹命吾与(十三)汝所作之国未作竟故可還尓伊邪那美命答白悔哉不速来吾者為黄泉戸喫然愛我那勢命(十七)入来坐之事恐故欲還且具与黄泉神相論莫視我如此白而還入其殿内之間甚久難待故刺左之御美豆良湯津々間櫛之男

柱一箇取闕而燭一火入見之時、宇士多加礼斗呂呂岐氐、於頭者大雷居云々　於是伊邪那岐命見畏而逃還之時、其妹伊邪那美命言、令見辱吾、即遣豫母都志許賣令追云々

火を忌む事

火を穢とする事ハ忌むめる事の初神代よりぞえたり。伊弉冊尊の神避まして黄泉におハしませし時伊弉諾尊の跡おひましゝに、かのめをひし附為黄泉戸喫とのたまひしハ、よもつ国の火にてしめたまひし事されバ今俗にも火の穢とて忌むるその本なきにあらず。或ハ火埃忌のれひことよりきたる事なるべし

○古事記上　於是欲相見其妹伊邪那美命、追往黄泉国、尓自殿縢戸出向之時、伊邪那岐命語詔之、愛我那迩妹命、吾与汝所作之国、未作竟、故可還、尓伊邪那美命答白、悔哉不速来、吾者為黄泉戸喫云々

さをなくさま

柳校間

擲矢間

○輟耕録第八京師城外の万柳堂ハ安拙のことをしるすに
此ニ歌児劉氏名解語花者左手折荷花、右手執盃歌
小聖楽云 緑葉陰濃偏池亭、水閣偏趁涼多、海榴初綻
朶々蹙紅羅、乳燕雛鶯弄語、對高柳鳴蟬相和、驟雨
過似瓊珠乱撒、打遍新荷、人生百年有幾、念良辰美景
休放虚過、富貴前定何用苦張羅、命友邀賓宴賞、飲
芳醑、浅斟低歌、且酩酊、從教二輪来往、如梭とあり 二輪
ハ日と月とのことゝ我解す

国立公文書館
National Archives of Japan